



アカデミー 「研修」の現場に行く!

広島県
広島市

公民館を拠点に中学生主体で立ち上げた 「このまちにくらしたいプロジェクト」

日本は人口減少に転じ、地域を取り巻く環境も大きく様変わりしている。今、各世代が抱えている孤立を取り除き、多様な世代が支え合うような地域づくりが求められている。地域に密着した公民館としてそんなアプローチに積極的に取り組んでいるのが広島市西区の古田公民館である。「このまちにくらしたいプロジェクト」の主人公は中学生で、既存の公園を舞台に新しい「子どもの遊び場」を創り出す取組みを通じ、住みなれたまちの未来を考え、彼らに共感する大人たちと一緒に行動するという、多世代型のまちづくりプロジェクトが進められている。中学生の声から生まれた行動が公園のあり方やその必要性を地域に問いかけるきっかけになり、多世代の交流機会は中学生にも大人にも、お互いの価値観を学び合える人間形成の場になっている。地域団体との連帯が深まり、町内会などから物心両面での支援が生まれている。プロジェクトの事務局、活動拠点の役割を果たした公民館は、地域という舞台で活躍する人材を輩出する控え室（インキュベーター）になろうとしている。

●●●●● ●●●●● 2013年秋、「このまちにくらしたいプロジェクト」が始動した

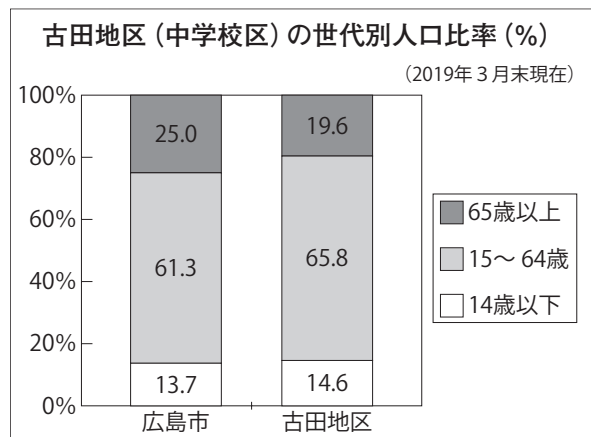
瀬戸内海に面し太田川デルタに発達した広島市は広島県の県庁所在地で、人口は119万4,524人。政令指定都市として8つの区を置いている。西区は中心市街地の西の郊外にあり人口18万9,607人。JR山陽本線と広島電鉄宮島線が通じ広島市中心部への通勤・通学者が多い。

西区のほぼ中央の古田地区（4小学校区からなる古田中学校区）は平野部と丘陵地からなる閑静な住宅地で、人口は2万6,871人（データはいずれも2019年3月末現在）。旧山陽道に面し歴史ある寺社や「武家茶道上田宗箇家元」があり、伝統芸能の「古江神楽」が伝わっているが、団地やマンションには新住民もいる。果実の「いちじく」が特産品である。

この古田地区に1988年、住民の交流拠点として「古田公民館」が開館した。現在は指定管理者の公益財団法人広島市文化財団が運営し、2018年に開

館30周年を迎えた。

全国的に少子高齢化が進む中、古田地区は広島市内でも比較的世代間のバランスがとれている地域。65歳以上の人口比率（高齢化率）は市全体の25.0%に対して19.6%と低く、現役世代（15～64歳）の人口比率は市全体の61.3%に対して65.8%と大きい。14歳以下の子どもの比率も市全体の13.7%に対して14.6%と高く「夫婦とその子ども」で構成される世帯の比率が高い。





古田公民館の全景



「多世代寺子屋ネットワーク」ミーティング風景

現状は若い世代が多いとはいえ、人口減少社会に入って将来は高齢世代への偏りが深刻になると予想される。そうなる前に多世代が支え合う地域の居場所づくり、ふるさとづくりを進めていこうと2011年、古田公民館は事業施策のテーマに「多世代」を掲げ、世代をつなぐ事業を展開する方針を打ち出した。

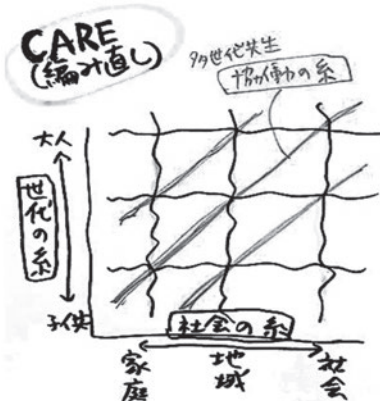
その意図について古田公民館の為政久雄さんはこう話す。

「人生100年時代と言われ健康寿命が延びる中で、高齢者だけでなく現役世代の間でも、マルチステージの生き方や、人と人がつながる人的ネットワークなど、社会参加への関心が高まっています。公民館でもそれに対応する必要があると考えました」

公民館が企画したワークショップに参加した住民有志の間で2012年、「多世代寺子屋ネットワーク」が立ち上がり、「多世代」をキーワードに、楽しみながら世代のギャップを乗り越えて地域の居場所をつくる活動を開始した。その理念は「CARE（編み直し）」。

子ども—大人の世代の「縦糸」、家庭—地域—社会の社会の「横糸」とは別に、多世代の共生、協働

多世代寺子屋の理念「CARE（編み直し）」



の「斜め糸」を通すという意味が込められている。

ミーティングでは寺子屋メンバーが50ぐらいのプランを出し合い、そこからいくつもの特色ある公民館事業が生まれた。

その例：

「いきいきプラチナ塾」(シニア対象の地域デビュー講座)

「あはは倶楽部」(趣味の大道芸を学び地域デビューしたシニア団体。多世代で集う「あはは演芸サロン」を運営)

「古江いちじくプロジェクト」(地域ブランドの特産品「いちじく」を、次世代へ継承するために小学校の総合学習を支援。いちじくのゆるキャラもつくった)

ちょうどその頃、地元の広島市立古田中学校(広島市初のユネスコスクール認定校)の校長先生から公民館に、生徒たちが取り組むESD (Education for Sustainable Development / ユネスコが推進する持続可能な開発のための教育) 学習を地域でも支援してほしいという相談が入った。生徒たちを地域社会に出す。そこで公民館と「多世代寺子屋ネットワーク」が受け皿として協力すると決めて2013年秋にスタートしたのが「このまちにくだりたいプロジェクト」だった。

●●●●
● 「みんなが幸せに使える公園づくり」を
● テーマに動き出した中学生たち

中学生が住民とともに人口減少など社会課題に向き合い、住みなれた地域で多様な世代が共生できる持続可能な将来像を描き、そのために今、住民自身でできる行動を起こす住民自治を目指す、



公園周辺の住民にアンケートを取る中学生



冒険あそび場づくりの拠点となる古江西町公園

というのが「このまちに暮らしたいプロジェクト」の目的である。

プロジェクトは、古田中学校の生徒、多世代寺子屋ネットワーク、地域住民・地域団体等の3者が実施主体となる。事務局を古田公民館に置き、ここを世代を超えた地域づくり活動の拠点とした。

中学生は、大人ではないが自分の力で判断でき、独自のアイデアも出せる年代。高校生になると進学先はバラバラで大部分は地域外に通学し、勉強や部活も忙しくなるが、中学生は放課後や休みの日にも学区内にとどまっていることが多く、地域に愛着を持った活動ができる可能性が高い。

プロジェクト1年目、2013年9月の第1回ワークショップでは、校外活動の公募に12人の生徒が集まった。その際、参加する大人たちには「話し合いのおきて」を課している。それは、中学生が自分たちで問題を発見して自分たちで問題を解決できるように、彼らの話にきちんと耳を傾け、お互いに対等な立場で話し合うというゆるやかなルールだった。

自分たちが大人になる30年後の古田地区の理想の将来像を思い描き、そこで自らがどのように暮らしているのかイメージしながら、地域を歩き、住民の話聞いて、それぞれ自分が主人公のストーリーをつくっていった。そしてストーリーに共通して含まれるキーワードを拾い上げ、今、自分たちに何ができるかというテーマを1つに絞り込み、それを地域住民の前で発表した。

中学生が選んだテーマは「公園」だった。それも最初は「公園は必要なのだろうか？」という疑問から始まった。公園と言えば、周辺住民が「子

どもの声がうるさい」と騒音の苦情を言ってきたり、「危ないからキャッチボールをしてはいけない」など利用ルールが禁止事項ばかりだったり、あるいはゲーム機の普及もあって子どもが公園で外遊びをしなくなり利用者が減っているなど、思い浮かぶのはマイナスのイメージばかり。中学生たちは話し合い、まず公園の現状と課題を知るために、地域でアンケート調査を実施して住民の声を集めることにした。

価値観、生活スタイルの多様化に伴い、全国各地で公園の騒音の問題が生じている。しかし集計結果では騒音を訴える声は少数にとどまった。それでも中学生は少数派の意見も尊重しながら解決策を探ろうと、こんなアイデアを提案した。

「公園で、声を出さなくて静かに遊ぶ『忍者修業ごっこ』の時間帯を設ける」

説明を聞いて驚いたのは大人たちで、「子どもたちにそんな気づかいをさせるような地域ではいけない」との声が上がった。

とかく多数決で物事を決めてしまう社会の中で、「みんなの幸せ」を考え、少数者の声も切り捨てずに解決策を探った中学生たちのアイデアは、大人たちの心を動かした。

「知らない子どもの声は騒音に聞こえるかもしれないが、顔の見えるコミュニティなら子どもたちの声は活気を与え、まちの力になるのではないだろうか」

それが子どもから高齢者まで多世代が共感するような意識の芽生えになり、世代間の交流と連携を促すことになる。

試行錯誤の中で身近にある公園のあり方を見つめ直し、「公園は必要。30年後にも残したい」という結



手づくり遊具で遊ぶ子どもをサポートする中学生



たき火でおやつづくり体験

論に達する。こうしてプロジェクトは、中学生が選んだ「みんながしあわせにつかえる公園★あそび場をつくろう！大作戦」という活動テーマで始動した。

●●●● ●●●●多世代が企画し、協力する冒険遊び場 ●●●●「ワンダふるたパーク」の誕生

プロジェクトが3年目に入った頃、卒業した先輩から引き継いで中学生のメンバーは世代交代していった。彼らは学区内に27ある公園の中から、古田公民館のすぐそば、幼稚園の隣にある地区内で最も古く、閑散としていた古江西町公園に着目した。JRの線路沿いにある列車を眺められ、緑が多くて遊具もあるが子どもの利用は少なくなっていた。彼らはプロジェクトのモデルケースとして、この公園ににぎわいを取り戻すためのアイデアを練り始める。

ある日、中学生たちは体験実習で広島市の中心部にある中央公園（広島市中区基町）に出かけ、NPO法人が運営する「プレーパーク」（冒険あそび場）を見学した。ここにはブランコやジャングルジムのような遊具はなく、広場や小川や廃材や工具があるだけ。子どもたちは遊具をつくって創意工夫して遊び、それを通じて「想像力」や「冒険心」を育てていた。保護者は事前に「自分の責任で自由に遊ぶ」という趣旨に賛同し、子どもを自由に遊ばせている。

中学生たちはそれを見て軽いショックを受け、「自分たちのまちにもプレーパークをつくろう」と思い始める。しかも、ただ子どもがそこで遊べるだけでなく、「大人も高齢者も含めた多世代が集まって楽しめる場所にしよう」と、「みんなの幸

せ」へのこだわりを見せる。こうして誕生したのが、古江西町公園を利用して開設されるイベント、冒険遊び場「ワンダふるたパーク」だった。

遊びのアイデアや遊具づくりのノウハウを盛り込み、このプレーパークは既存の公園になかった「創り出す遊び」にあふれている。

その例：

「ぼうけんターザンロープ」（木の間にロープを渡し、廃材のタイヤで滑り降りる手づくりのジップライン）

「木のこうさく」（無造作に置かれた廃材の木切れを利用して金づち、のこぎりなどで工作を楽しむ空間）

「たき火」（おやつのマシュマロを焼く体験ができる。）

「カフェとおやつのいこいのゾーン」（テーブルと椅子を置き、中学生がコーヒーやジュース、おやつを提供するカフェを運営し、保護者や親子連れがくつろげる）

その他、「輪投げ」「玉入れ」「竹ブランコ」「巨大ハンモック」「ぶんぶんこま」「的当て」「すなばあそび」「じゅうなあそびゾーン」など、毎回ユニークなあそび場が登場する。

そこでは中学生が小学生や就学前の子どもたちの遊び相手になり、サポートする。保護者はカフェでくつろぎながら、遊んでいる子どもたちを見守ることに徹する。

「大道芸コーナー」もあり、ここでは大人たちが皿回しやバルーン、手品、紙芝居など大道芸を子どもたちに披露し、教えている。仕切っているのは公民館の「地域デビュー講座」から生まれたシ



多世代で遊べる皿回しを教えるシニア



子ども会との連携で実現した餅つき行事

ニア世代の「あはは倶楽部」で、芸を演じればすぐに子どもたちの人垣ができた。「木のこうさく」のコーナーでも、近所の高齢の男性が工作指導者として企画・協力を申し出た。

「公園が、公民館で学んだ成果を生かし、子どもたちの祖父母にあたるシニア世代が地域で活躍する場になりました。そんな多世代交流が親世代にも安心感を与え、顔の見えるコミュニティ、地域のセーフティネットを広げるのに役立っています」

写真を趣味とするメンバーがイベントで撮影した写真は、地域内の古江郵便局のロビーや民間ギャラリーで展示され、活動のいいPRになっている。

●●●● イベントをきっかけに、多世代が参加する地域づくりの動きが加速した

2015年に始まった「ワンダふるたパーク」の取組みは、事故も大きなトラブルもなく定着。それにつれて、主役の中学生だけでなく小学生以下の子どもたちにも「自分たちは公園づくりの担い手」という意識が芽生えつつある。イベントは住民の間でも好評で徐々に軌道に乗り、4年目からは開催が年2回から年4回（6月、8月、12月、3月）に増えた。毎回100人を超える来場者があり、アンケートでは「公園のあり方を考えるきっかけになった」という答えが8割を超え、認知度、信頼度が高まり、満足度でも高評価を得ている。地域の幅広い世代をつなぐ地域の居場所として共感、支援の輪が広がっている。

中学生が主体で遊び場づくりを行った「このまちに誇りたいプロジェクト」への地域の理解、共感が浸透したことで、最近ではイベント以外にも

様々な形の支援が行われるようになった。町内会が管理する公園倉庫に活動用具を置かせてもらい準備負担が軽減したほか、老人クラブの高齢者が、公園で自分の子ども時代に得意だった遊びを子どもたちに指導したり、遊びのための落ち葉を集めたりしてくれた。女性会は防災炊き出し訓練と連携して子どもたちに豚汁やおやつを提供した。少子化で会員減少に悩む子ども会から公民館に「年末の餅つき行事の人手が足りない」という相談が持ち込まれた時は、中学生たちがつき手を担い、大人の指導を受けながら公園で餅をついてぜんざいを振る舞うなど、世代間交流が生まれた。このようにプロジェクトの継続に伴い地域団体との連携が広がっている。

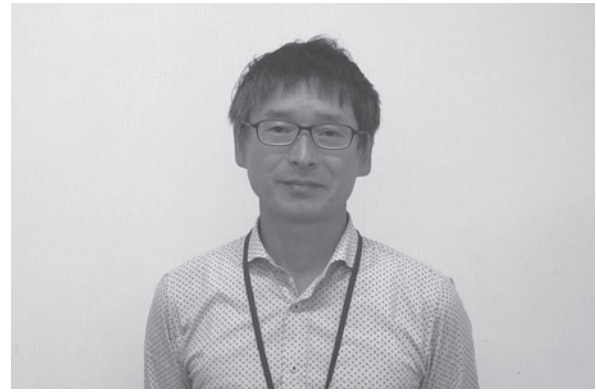
高校生になったOB・OGも手伝っている。中学時代に第1期生として立ち上げにも関わったあるOGは、大学受験の面接で自己PRとしてプロジェクトについて熱心に語り、合格している。

他地域の団体との情報交換や交流も活発化している。広島県内の遊び場づくり団体のネットワーク「つくるあそび場ねっとひろしま」が発足し、SNSで情報発信している。その活動の一環として2019年3月、古田公民館に7団体が集まって「多世代あそび場シンポジウム」が開催され、県内を網羅した「あそび場マップ」を作成しようという企画が持ち上がっている。

中学生の声から生まれたプランが公民館や地域住民のサポートによって具現化し、公園を再生し多世代交流の促進につながったこと、ESD教育の一環として取り組んだことなどが評価され、プロジェクトの活動拠点の古田公民館は2018年11月、



プロジェクトを担う中学生と住民メンバー



古田公民館の為政久雄さん

第71回（2018年度）「優良公民館最優秀館」として文部科学大臣表彰を受けた。

●●●● ●●●●住民活動のパートナーとして ●●●●これからの公民館に求められる役割

「このまちに暮らしたいプロジェクト」は、当初、事業計画外で予算もなかったが、2014年度は「環境省・持続可能な地域づくりを担う人材育成事業」、2016年度、2017年度は「広島県公民館連合会・公民館等活性化モデル事業」、2018年度は「ひろしまこども夢財団・基金活動助成事業」から、2019年度は「広島市社会福祉協議会・ひろしまの地域福祉推進“チャレンジ応援”助成事業」から、1回で5～10万円程度の実施費用への助成を受けている。しかし為政さんは、活動資金を助成金に依存しない体制づくりがこれからの課題になると言う。

「2019年からは町内会が協賛金をくださるようになりました。住民主体の持続可能な取組みにするには、財政面では公園での収益活動やサポーター制度、地域団体などとの連携のような工夫が必要です。人材面では遊び場づくりの担い手になる地域の大人の協力者の発掘、育成を促すことも必要でしょう。将来を見据えて、公園活用以外の活動テーマも探りながら、プロジェクトとしての『自立』を促す時期に来ています」

中学生の声から生まれた地域のあそび場づくりの試みはほんの小さな一歩だったが、公園のあり方、その必要性を地域に問いかけた。

「公園という地域の居場所が、顔の見える人間関係づくりや世代をつなぐ役割を果たすことで地域の付加価値が高まり、『このまちに暮らしたい』戻っ

て来たい』と感じられるような、住み続けられるまちづくりにつながっていくのではないのでしょうか」

古田地区は教育熱心な地域で、生涯学習意欲も高いという住民特性も味方したが、中学生が違った種を地域でどう育てるか、住民の当事者意識や行動力を引き出す際には公民館での学びが活かされてくるだろう。

古田公民館にとってもこのプロジェクトは、これからの公民館の役割について大きな気づきを与えてくれたという。

「今、公民館は趣味のサークルの集まりなどを通じて住民を施設というハコに集めることに力を注いでいるように思います。舞台を提供することももちろん大事ですが、本当の舞台は公民館というハコモノにとどまらず、公園や商店街のようなひらけた生活の現場にこそあります。そんな地域のフィールドで活躍できる人材を送り出す『控え室（インキュベーター）』の役割を果たすこと、地域のことは地域で解決できる住民自治の力を養うことも、これからの公民館に求められる役割ではないかと思っています」

「住み続けられるまちづくり」は、2015年の国連サミットで採択された「SDGs（Sustainable Development Goals／持続可能な開発目標）」の17の目標の1つ。地域に密着した公民館は、そこで暮らす一人ひとりの住民が持つ地域を思う気持ちを引き出し、育み、「ずっとこのまちに暮らしたい」という気持ちに寄り添って、住民の自治力や地域の付加価値、持続性を高められるような住民活動のパートナーでありたい。為政さんはそう考えている。